
彼女は青空に臨む。

叉都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は青空に臨む。

【Nコード】

N2891J

【作者名】

叉都

【あらすじ】

t a n k y o u . l o o k !

ブローグという名の後悔

彼女のつく嘘は、優しい嘘でした。

私が彼女についた嘘は、ひどく残酷な嘘でした――

なぜ、彼女への未練が残るのだろうか。

なぜ、前へ進めずにいるのだろうか。

彼女が消えてしまった後、ずっと考えていた。

大人になったら、未練を断ち切ることができるのだろうか。

まだ幼かった私は、ただ泣くことしかできなくて。

でも、それがせめてもの「償い」であつたから。

中学生になった今、涙を拭いて、前をみて歩くことができるだろうか。

慟哭し、とても居苦しい場所に置かれても……。

序章

「夕岐ー。準備できた??」

「できたもなにも待ってただけど。」

本を片手に、冷たい口調で夕岐は答える。

「今日から新しいクラスかぁー。どきどきするね!」

そう! 今日から俺たちは中学2年生!! 遊ぶのも今年がピーク。明るく問いかける俺に対して、夕岐は、

「別に。」と適当に返事を返す。

本を目で追う姿は、もう見あきてしまった。

夕岐は、本をパタンと閉じる。

「夕瑚、行くよ。」

そう呼ばれて車に乗った俺たちは、スクールバス停へと向かう。

いつも通りのリズムで刻まれていく俺たちの中学校人生。

これがいいのか悪いのかわからないが、楽しいことは確かだった。

「千秋いい! おはよおお!」

「・・・はよ。何だお前そのテンションは。」

バス停につくと、幼馴染の千秋は今朝の夕岐と同じ目で俺をみる。

「こいつ朝からうるさいの。なんなの。」

夕岐は、イライラして貧乏ゆすりをし始める。

「おいこらぁ!! お兄ちゃんに向かってなんて口を!!」

「1分ぐらいの差でお兄ちゃん気取りしないでよ。」

俺の言葉に夕岐は上乗せしてくる。

「お前らも変わった双子だよな。ほんと。」

千秋はあきれたような溜息をついた。と同時にバスが来て、俺たちはバスに乗り込んだ。

「…………。いやだ。」

夕岐は新学期そうそうすべてを闇に変えそうな目で俺のクラスへ来た。

なんというか……ボロボロ？

「どしたの？」

教室の入り口の前で倒れこむ夕岐を起こすと、

「千秋に女子がまとわりついて……。」

「お前も女子だろ。」

「そこじゃないよ。」

夕岐は制服についたほこりをパンパンとたたき落とすと、

「2 - 1、最悪。」

とつぶやいた。

「千秋いるじゃん。」

「ごろんの通り。」

夕岐はイライラするのが趣味なのはしっていたけど、とかいうとまた「違う。」と目力で殺されそうになるので口には出さなかった。

俺はその光景を見てみたいという願望に刈られ、「えー。」と拒絶する夕岐の腕をつかみ、

万全の態勢で2 - 1に向かった。

「千秋くんって医者になるの？ きやははー」

いや、医者のことだけでもね！！

心の中で答える。

「夕瑚がこたえてどうすんの。」

テレパシーだ！テレパシー！！

「違うから。」

夕岐はあきれ顔で呟いた。

千秋は今にも死にそうな顔をしている。

「千秋……。大丈夫かな。」

「大丈夫でしょ。医者の子だから。」

「いやそれ関係ない!!」

「ごだごだ夕岐と言いついてるうちに、

「わーーーー!!」

千秋がとなりにいることに気がつかなかった。

おかげで大声でさけんでしまった。

「おつかれさまです。千秋様？」

隣から迫ってくる黒い影に、とっさの言葉。

「なんで助けなかった!!」

「なんで俺なの?! 夕岐は?!」

首を激しくゆすられて声がうまくだせない。

ふと隣をみると夕岐はしれっとして窓の外を見ている。

「夕岐いいいい!!」

最後の力を振り絞り、夕岐助けをもとめた。

一章 秘密は守ろう！

「あー。2の1やだ。本当にやだ。」

夕岐に肩をたたかれながら、震えた声で千秋は言った。

「じゃあ俺のクラスくる？」

「2の1でいいです。」

「おい！！」

千秋はメガネをかけると、夕岐から借りた本を読み始めた。

「5組ってだれか仲いい人いたっけ？」

「んー。3人くらい。」

俺はまだ薄いクラスとの記憶を探り、なんとか3人見つけ出した。

「なんか……。お昼休み日和だよなあー。ぽかぽかしてる。」

「それは春だから。」

窓の外に広がる青空を見上げて夕岐はつぶやく。

「そういえばさ、4月29日……。さ、」

俺は途中途中言葉を詰まらせ、夕岐の顔をうかがう。

「なに？」

千秋の肩たたきをやめて、夕岐が俺のほうを見る。

「いや、なんでもない。」

「ふーん。」

俺はとつさに夕岐から目をそらしてしまった。

夕岐は、千秋の肩たたきをやめ、教室を出て行ってしまった。

「あ、ここ夕岐にはほこりっぽかったか。」

千秋は教室を見渡す。

「お前、なんて言おうとしたんだ？」

千秋の言葉に心臓が大きな音を立てる。

「え……。真琴のお墓に行こうかって……。」

「……………」

背もたれにおなかをくつつけながら、椅子を左右にゆらした。

「……………。つかここなんの教室?!」

沈黙に耐えきれず、話題をどうでもいいことに変えた。

なるべくならこの話はしたくないから。

「いらなくなつた本を置いてる教室。」

「へえ……………」

いくつかにわけられてそびえる本の山。

窓からはあたたかい日差しがさす。

椅子も何個があり、よくだれも見つけなかったなというほどいい場所だ。

「俺図書委員だから鍵持ち出せるんだ。」

「なんでみんな俺の心の言葉わかるんだよ!」

千秋は本から目を離して俺のほうチラツと見ると、また本に視線を戻し、

「……………たまに声に出てるから。」

ページをめくりながら、ため息に交えた。

そうなのか……………!!

「ほら、また。」

千秋は口をほころばせて笑った。

4月21日

もうすぐ真琴の誕生日だね。おめでとう。

そういえば、クラス替えて千秋と同じクラスになったよ。

それもそのはずか。だって1年生の時とられたアンケートの友達希

望の欄に、

「的場千秋」としか書かなかったから。夕瑚って書いてもきつと離されるだろうし、

部活の仲間は誰となってもよかったから、書かなかった。

真琴が存在していれば、真琴の名前を一番最初に書いたと思う。

それにしても、クラスの子にはいつも怒りがわき出てくるよ。

お前らが死ねばよかったってね。

真琴の代わりに。

まったく、キャピキャピ騒ぐし、ウザイのかなんなのかわからない生物だよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2891j/>

彼女は青空に臨む。

2011年1月26日03時56分発行